横浜陶芸友の会だより

第１５３号
平成２５年
１月１日発行

新春を彩る
第34回横浜陶芸友の会 作品展に向けて

会長　松崎紀一

皆様いかがお過ごしでしょうか。我が横浜陶芸友の会会員は、いつも元気で、人に優しい仲間たちですね。陶芸という共通の趣味があり、共に語り合い、研きあい、支えあえることはこの上も無い喜びです。私は昨年の窯場見学会～薩摩焼き～に久しぶりに参加させていただき、改めて本会の素晴らしさを実感しました。いや、本当に横浜陶芸友の会の窯場見学会は充実していますね。

さて、今年の作品展は34回目を迎えますが、今年は特別なものになります。例年お世話になっている会場の市民ギャラリーが、耐震対策を理由に、市の方針で解体され、移転することになり、関内の市民ギャラリーでの開催は今回限りとなります。友の会としては、次年度以降のことは未定ですが、今回の作品展は是非、皆様のお力をいただき、より充実したものにしたいと思います。そのためには皆様の一つでも多くの作品参加を強く望みます。一人でも多くの方の参加が、より豊かで実りのある作品展になると思います。一人ひとりは個性という名の輝きがあり、集まれば集まるほど相互に影響し合い、より個性が際立ちます。また、今年も、市内の特別支援学校の児童・生徒さんの素晴らしい作品展示が、特別コーナーとして計画されています。大いにご期待ください。すべての会員の方に、会場にお越しいただいて、作品の鑑賞と併せて、友の会の明るい未来について語り合っていただければ幸いです。

最後に、友の会の運営にかかわる役員を募集しています。お互いに生活があり、できることとできないことがございますので、協力し合いながら、共に会の発展に向けて、力を合わせていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

作品展のお知らせ

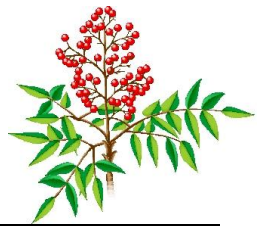
昨年12月にお手元に届いていると思いますが作品展の要項を抜粋して再度お知らせいたします。

市民ギャラリーの移転に伴い今年度の開催で最後になります。毎年出品されている方も時々の方も、出されたことのない方も、33回も続けてきた関内での作品展です。是非１点でも一人でも多くの会員の方の参加をお待ちしております。

1月10日～15日まで
10時～18時
（初日は13時より最終日は16時まで）

①申し込みをする。
（1月4日締め切りです。）
・申込書を郵送またはメールも可
・会場当番も是非お願いします。
当番は（午前）10時～14時
（午後）14時～18時
（1日）10時～18時

②個々の準備は
作品添付用紙に氏名を記入して作品に貼っておいてください。



③当日

9時から整理券を配ります。その後、会場設営等の準備を行い10時30分より整理券の順番に受付が始まります。出展料・友の会会費・懇親会申し込み会費等の支払いを済ませてから展示場所を決めていただきます。

ご自分のスペースはデスプレイなど用意して飾り付けてください。(敷き物皿立てなど)

④最終日

16時集合です。作品を片付けてから什器を倉庫に仕舞って掃除をして解散になります。

詳細は事業部からの案内を熟読してください。

友の会はみんなで盛り上げていく会だと思います。人にしてもらうのではなく出来る範囲で会場の準備やお掃除やお当番やら参加していただきたいし、仲間を作る良い機会だとも思います。出品だけでなく作者もデビュウさせてください。

広報小松

「薩摩焼　窯場見学会」報告

黒薩摩「龍門司焼」窯の中

期　日・・平成24年10月26日（金）～27日（土）
見学場所・・鹿児島県（姶良市・日置市・指宿市・鹿児島市）
参加人数・・24名
交通機関・・飛行機、中型観光バス
宿泊場所・・「指宿シーサイドホテル」
天候　・・晴れ時々曇り
昼食場所・・26日「豚珍館」
27日奄美の里「華ん華」

尋ねた作陶家及び見学先

①「龍門司焼」川原 史郎（姶良市）

黒薩摩「龍門司焼」は、300年余りの歴史を守り続けています。天然釉が施された優美な花瓶、カラカラ（酒器）、皿等の作品を鑑賞してから薩摩焼の歴史についてのお話を伺いました。

その後は釉掛けや土作りや登り窯を見学しましたが、土練機等の機械を一切使わず全て手仕事で作業をしている姿には驚きと感動でした。蓋付きの湯のみの実演もして下さいました。

黒薩摩「龍門司焼」川原 史郎先生

②竹之内 彬裕（姶良市）

静かな住宅街の中にある御宅は少し紅葉しかけた木々や野の花に囲まれていました。

まずは、2グループに分かれ、陶箱の実演を見せていただきました。石膏の型を使って数分で完成させていました。

抜き絵の手法についても教えていただきま

した。土肌を生かした作品には、庭の葉や実や花のモチーフが多く、優しさと温かさを感じました。

竹之内 彬裕先生

③15代 沈 壽官（日置市）

３０００坪と言われる広大な敷地には作品収蔵庫、売店、登り窯、工房、六角亭等がありました。まずは、慶長３年（１５９８年）初代沈当吉から今日までの作品が展示してある「沈家伝世品収蔵庫」の見学からスタートしました。

その後の15代沈壽官の話は会員の皆さんの質問を中心にしながら、沈家の今日までの歴史や作陶への想いなど幅広く聞く事ができました。

体調によっては14代沈壽官にお会いできるかと期待していましたが、お会いできず残念でした。

最後に全てが分業になっている工房で「作陶・削り・彫り・絵付け」等を見学しました。

④絵付け工房「秋月窯」　西田 秋雄

国道沿いにある和風の建物の工房には、野の花の文様が描かれ、思わず手に取りたくなる美しい白薩摩の食器や花瓶。斬新さを求め、桜島の灰をのせた箸置きや新築祝いの注文で作られた家などユニークな作品も並べてありました。

注文に応じて手作りをする先生の工房や窯も見学させていただきました。

秋月窯西田先生のところにあった陶板。

⑤有山 禮石

工房には「これも薩摩焼？」と、思うような釉薬がたっぷり掛かり、大きくて存在感のある力強い作品がたくさん並べてありました。

コバルト釉の上で白い長石釉が優美に亀裂を走らせる「氷裂紋」は印象的でした。

作品を前に作品への想いや本焼きをした上に釉薬を掛けるご苦労等お話していただきました。

工房では二人の息子さんが作業しているのも見学しました。

⑥「南州工房」内山 義明

閑静な住宅街の一角に工房はありました。透かし彫りの作品に感動していた私は「彫り」の実演をお願いし、期待していたのですが、デパートの展示会や注文の関係で実演はしていただけませんでしたが、道具をみせていただき、作り方を説明していただきました。

又、ロクロでお皿や香炉の実演をしていただきました。同じ場所で我々の声や動きを気にすることもなく集中して絵付けをしている息子さんの様子も見学することができました。

⑦薩摩金襴手絵師　廣田 実雪

坂道をグルグル回って登った住宅街に工房がありました。

工房の中にはパリ万博125周年に出展した作品やザビエル記念大皿や英国「ジャパン2001」の大皿、九州国立博物館貴賓室に展示されている等の写真がたくさん飾られていました。

下絵をせず、デザインをダイレクトに描く先生は絵だけに全精力を傾け、寒い時は眼鏡に息がかからないように口に半紙を加え、時には息も止めるそうです。

350万円の大皿にも触らせていただき、50色の絵の具と、金数十グラムを使う説明に手が震えました。「この仕事が大好きで、生まれ変わっても、この仕事をしたい。弟子に教えるより、まだ、学ぶことがたくさんある。ともかく、良い物を残したい。感動するものを残したい」との言葉が心に残りました。

見学場所

・「長島美術館」鹿児島市

桜島が正面に見え鹿児島の市街地を一望でき、ロケーションのすばらしい美術館でした。

展示室が7部屋あり　白薩摩、黒薩摩を多数見ることができました。

感想

「薩摩焼」鹿児島は距離も遠かったのですが、今回の見学会は実施できるかどうかにたどりつくまでも時間がかかりました。

皆さんのご協力で24名の参加者になり、実施することができました。

今回は無理かなと、諦めかけたこともありましたが、見学会後、今年も皆さんの「良かったよ。ありがとう。」の言葉をいただき、実施できて良かったと思いました。

いつもながらの「色々な薩摩焼をみせたい」の思いから、今年も欲張った少々忙しい行程だったかもしれませんが、皆さんのご協力で予定通り行うことができました。

私の視聴覚機器の知識不足からテレビが使用できず、事前の説明が足りず、申し訳ありませんでした。

今年も良い天気に恵まれ、薩摩焼のすばらしい先生方にもお会いでき、参加者皆様の心温かいご協力で無事終わることができました。

この感動と感謝の気持ちを込めて薩摩焼の先生方にこれから礼状を書きたいと思います。

清水あや子

「薩摩への想い」

出淵　僖江子

今年の窯場見学会は「薩摩焼き」との事だったので、私はとても楽しみにしておりました。当日の朝、機上から見る懐かしい鹿児島の街は曇り天気のせいか、桜島の爆発による噴煙のせいか、薄曇に覆われていて、残念ながらあの美しい櫻島は帰るまでの二日間、私たちに姿を見せてくれること無く心残りの一つとなりました。

若い頃に両親と共に訪れた鹿児島の城山から見た桜島の景色をもう一度見たいと思っていたからです。

実を申しますと、私が育った家は鹿児島の出身で、先祖は島津家に仕えた者でした。幼い頃父が大きな系図箱を開けて虫干しをする傍で色々な先祖の言い伝えなどを聞かされて育ちました。住んだ事はないのですが、私の故郷は鹿児島との思いが強く、後年になって焼き物にふれる事になり、薩摩焼きのことを知るにつれ、私の心は複雑な思いに駆られました。

司馬遼太郎氏の書かれた「故郷忘じがたく候」を読んだ時から、今尚、かの国の貴族としての誇りを守り育ててきた沈壽官さんにお逢いしたいと、ずっと願っておりました。念願かなって、お目にかかった第十五代沈壽官さんは思っていたとおりの、お父上の十四代を彷彿とさせる大きな暖かい方でした。十四代にお逢いできなかったのは本当に残念でしたが、その受け継がれているものは充分に伝わり、私は一気に暖かいものに包まれ今でも思い出すと、胸がいっぱいになります。そのほか竜門司焼、宋艸窯、秋月窯、渓山窯、等等、それぞれが伝統を守りながら、独自の境地を拓いて、努力している姿と暖かい人柄に触れて心が豊かになる旅でした。

いつも乍ら、清水さんはじめ、旅行を担当される事業部の方々のお骨折りで楽しく有意義な旅になりました事、本当に感謝に堪えません。有り難うございました。

可能ならばもう一度ゆっくりと鹿児島を訪れて、墓参りをしながら、歴史を感じてみたいと思っております。

「薩摩焼めぐり」

大内　広子

快晴の鹿児島空港へ降り立ちました。

前日桜島が小噴火したが、現地では年間八０回もあるとか、にびっくり。

絵付師は風震で筆が振るえ、ロクロ師は灰が掛かると作品に黒くボツボツが付き、取れないといろいろ皆さん苦労している様子。

さすが鹿児島で２日間黒豚三昧（昼とんかつ、夜なべ、次の日陶板焼き）白豚の私は共食いです。(なぜって私のメールアドレスはホワイトピッグですもの・・）美味しかったです。

あと大好きな名物の黍魚子（キビナゴ）は、酢物、甘辛煮、から揚げにといろんな味付けがあり、これも美味しかったです。

キビとは、薩摩弁で帯と云う意味だそうで、小さい魚身に銀色の帯が１本、綺麗です。

龍門司焼の川原先生は口ひげの九州男児で、いかにも黒モンの蛇蝎釉や、鮫肌釉のぐい呑に焼酎をグイ～！とが似合いそうな風貌。

焼酎いれや、ぐい呑を買い求めている人ちらほら・・・

沈壽官窯の15代目は大きな名と４００年の歴史を背負う国際人、お話も上手で広い教室、広い庭、広い工房、分業の職人達が静かに絵付けや、細かい彫りをしていました。

作品はウン十万円也と私には手が出ません。店先に春秋の七草を植え、絵付けが可愛らしい。女性好みの秋月窯の西田先生は腰が低く、そして、やさしいロンゲの人でした。可愛らしいお猪口を数名が購入していました。

本当に狭くて全員はいれるかしら?と、幹事が心配していた絵師広田先生の工房は、前もって片付けとお掃除をしてくださったとかで、ギュウギュウ詰めでも、金襴手の話を聞き、「これが好き！で何回生まれ変わっても金襴手絵師になる」の言葉が最高でした。もし売るとしたら３５０万円の大皿！　何回生まれ変わっても買えないわたし。家宝にするのか？？新作小物をゲットした人あり。

夜ホテルでの食事時、利右衛門と黒霧島を頂きました。

二次会でも薩摩七十七万石と、違った銘柄の焼酎を飲み、７箇所、長島美術館を巡り２日間駆け足の旅でした。焼酎好きにはたまらない旅だったことでしょう。(私はビール党なので) どの先生も必ず通りに出て見送ってくれました。感謝感激です。

詳細は伏せますが、ハンサム男性に見とれてバッグを置き忘れた美女と、お風呂場でパンツを盗まれた美女珍事が２件発生しました。皆さん加齢です～　気をつけましょう。

編集後記

先の太平洋戦争の折、米国の日系一世・二世の人達が強制収容所で作った手工芸品の数々がテレビで紹介され、過酷な生活の中で楽しみを見出せる美意識、手工芸の力に感嘆しました。友の会作品展が楽しみです。

吉良

本号編集中に地震がありました。すわ東海沖地震の前触れかと、かねてから用意していたリュック（非常持ち出し袋）の中に犬のえさを放り込んで、外に出ると尻尾振ってお気に入りのボール加えていそいそとやってきました。野生を失っているのか、「何でもないよあわてないで」　といったのかわかりませんが、常日頃の心積もりって大事ですよね。なにごとによらず。

小松

窯場見学会に参加なさった方々が口々に「良かった」とおっしゃる・・・こうして編集していると、その良さが伝わって参ります。やはり窯場見学会は次回も、次次回もと、ずっと楽しみに続いていって欲しいと願います。

信岡

陶陶さん

第 75 号

※作品展搬入の巻　あかほし

ホームページもチェック!!

横浜陶芸友の会

検索

http://www20.atpages.jp/tomonokai/

横浜陶芸友の会だより
第１５３号
（平成 25 年 1 月 1 日発行）
発行人 横浜陶芸友の会
会長　松崎 紀一

編集責任者 広報部長 吉良謙